姶良歴史ボランティア協会広報誌第 17 号　　発行日　平成 24 年 11 月 2 日(金)

あいらの歴史と物語

発行責任者：姶良歴史ボランティア協会
会　長　橘　木　雅　晴
編　集　者：広報部長　竹之下　洲　一

連絡先：〒899-5421 鹿児島県姶良市東餅田 498　　姶良市歴史民俗資料館 TEL 0995(65)1553

特集「かごしま下町研修」（報告）

6月14日（木）実施

南洲寺の仏像群

島津義弘を救った柏木源藤の墓

橘　木　雅　晴

南洲寺に隣接する南林寺由緒墓地の一角に、関ヶ原合戦で島津義弘の窮地を救った柏木源藤の供養塔があります。

退き口での島津軍は、徳川四天王の一人・井伊直政の猛追に遭い、島津豊久や長寿院盛淳も義弘の身代わりとなって討ち死にしました。その時、一団の中から源藤が進み出て鉄砲を放つと、先陣をきっていた井伊直政の脇腹に命中、義弘主従は窮地を脱することができました。

直政はこの時の傷がもとで一年半後に病没してしまいました。義弘を恨むことなく島津の退き口を絶賛し、家康との和睦の仲介に尽力しています。

源藤は退き口での戦功により、義弘の隠居所である加治木に住んでいましたが、直政の死を知り、これを哀れみ出家放浪の旅に出たため、子孫は断絶したといわれています。そんな源藤の墓だけはいつも花が手向けられています。

幼年学校（賞典学校）跡

松　元　淳　一

照国神社に向かって右手に探勝園跡があります。その庭の階段を上がった右手に「幼年学校跡」の碑があります。

幼年学校は、西郷隆盛・桐野利秋・大山綱良らが、明治維新の功績の賞として与えられた賞典禄をもとに明治７年(1874)に設立されたので、「賞典学校」とも呼ばれました。

篠原国幹を監督に、漢学の久木山泰蔵、洋学の深見有常らの教師をはじめ、オランダ人のスケッペル、イギリス人のコップスらの講師も士官養成の教育にあたりました。

翌年の明治８年(1875)には、学校の外国留学制度に基づき、木尾満次・救仁郷哲志・日高正雄の３名を、翌９年(1876)には、野津伝之丞・柏原正一郎の２名を留学させました。

また、西郷を慕って遠く庄内(山形県鶴岡地方)から来た２少年、伴兼之・榊原政治もこの学校で学びました。二人は西南戦争でも西郷と行動を共にして、一緒に南洲墓地に眠っています。

俊寛の碑

吉田　茂子

俊　寛　の　碑

「俊寛の碑」の建つ地は、平安後期、甲突川河口で、堀があり船舶をつないでいた所でした。

俊寛は源氏の出の人で父の後を受けて法勝寺の執行となり、権勢と栄華を誇っていた僧でありました。

武家政権の創始者平氏が栄華を誇っていた時代、後白河法皇の近臣など北面の武士らが俊寛の山荘に集まり、瓶子を倒して、おごれる平氏に対する悪態をつきながら酒盛りをしていたところ、これを密議として密告されてしまいました。平氏はこれを謀反の企てとして、居合わせた俊寛・成経・康頼の三人を流罪にしました。安元3年(1177)6月の鹿ヶ谷陰謀事件です。

三人は薩摩国小野湊(今の鹿児島市中町御着屋通りあたり)を小船で出帆しました。山川沖にさしかかったところ、辰巳の風(東南風)にさえぎられ、船は鹿籠(枕崎)の浦に着岸し、七日間逗留して配流地鬼界島に着きました。

歳月が流れ、成経・康頼は赦免状が出され都に戻されますが、俊寛は許されることなく一人島にとり残されてしまいました。

俊寛に仕えていた三兄弟の一人「有王」は、島に渡り家族の安否を伝えました。俊寛は、娘のかくれしのぶ日々を綴った手紙を読み、絶望の果てに絶食して、37歳の最後を遂げました。有王はそれを見届けたといいます。

明治31年(1898)ごろに埋め立てられるまで俊寛が出帆した堀は俊寛掘と呼ばれ、都へ帰ることができなかった僧の死を哀れみ、碑を建てて今日まで語り継いでいます。

城山の西郷銅像

竹之内　和　仁

鹿児島市立美術館の横に軍服姿の西郷さんの像が建っています。

この像は彫刻家安藤照が、昭和3年(1928)に制作にかかり、9年後の昭和12年(1937)に完成させたものです。

制作者安藤照は、鹿児島出身の彫刻家で、戦前忠犬ハチ公像を造った人ですが、このハチ公は、軍需供出されました。現在東京の渋谷にあるハチ公像は、子息の安藤士が昭和23年(1948)に制作したものです。

西郷像は、軍需供出や昭和20年(1945)の空襲から免れて、制作当初の姿を保っています。

かの有名な上野の西郷像は、宮内省から500円を下賜され、さらに全国2万5千人の寄付金により明治31年(1898)に高村光雲が制作したものです。西郷没後21年ほどでできており、西郷さんが短期間に復権できたことのあかしです。西郷さんが全国民にいかに慕われていたかが分かります。

明治22年(1889)2月11日帝国憲法が発布され、その時の大赦令で西郷さんは賊名が除かれ、正三位を追贈され、さらに明治35年(1900)6月に遺子寅太郎に侯爵が授与されています。

中央政権で活躍し、のちに西郷さんと対立することになった大久保利通の像は、甲突川河畔に昭和54年(1979)9月に建てられました。

西　郷　隆　盛　像

研修発表　坊津研修視察

近衛信輔と坊津

竹之下　洲一

坊津の海岸沿い中坊県道の脇に、かつて近衛信輔が秀吉によって配流され、約 15 ヶ月暮らしたという居宅跡があります。

信輔は、流浪の関白として鹿児島に長く逗留したこともある近衛前久の嫡男で、関白職をめぐって秀吉と対立し、左大臣をやめたのち、文禄 3 年(1594)に坊津に配流されました。

坊津時代の信輔には多くの伝承が残されています。『三国名勝図会』には、まず信輔の寓居の庭に古紫藤が植えられ「近衛藤」と名づけられたこと、次に能筆家信輔は近くの硯川という泉水から硯水を汲んでいたこと、さらに坊津の名刹一乗院には信輔の書簡と連歌が所蔵されていたことなどが記してあります。

摂関家という貴種の配流が、周辺の人々の好奇心と同情を呼び起こし、多くの伝承が生まれていったのでしょう。

信輔は慶長元年(1596)9 月許され帰京します。慶長 6 年には左大臣に再任、慶長 10 年関白となり慶長 19 年 50 歳その生涯を終えています。

倭寇について

恒吉　一洋

倭寇とは、「倭(日本)による侵略」という意味で、中国や朝鮮では日本人海賊をさします。主に 13～16 世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸及び東アジア地域で活動した海賊で、私貿易・密貿易を行う貿易商人のことをいいます。

13 世紀初めごろから、正式な貿易のほかに、通商に名を借りて略奪を行うものが出てきました。これが倭寇の始まりです。

倭寇は前期倭寇(14～15 世紀)と後期倭寇(16 世紀)に大別され、前期倭寇は主として日本人が、後期倭寇は主として中国人が多数を占めていました。

倭寇の経由航路としては、堺～土佐沖～坊津～琉球列島～中国大陸～朝鮮半島のコースがよく利用され、薩摩の多くの人が倭寇に参加していました。

薩摩は倭寇の最大の根拠地の一つであり、なかでも坊津は私貿易船の出帆地・帰帆地としての拠点港となっていたのです。

ベールにおおわれた薩摩塔

西田　實

輝津館 1 階の床には、一石でできた高さ 73 cm の石塔が展示してあります。

その構造は、高欄を備えた須弥壇側面に浮き彫りの四天王、その上は壷形の塔身に彫り込んだ尊像、最上は反りのある屋根となっています。

昭和 32 年に発見した齋藤彦松は,日本にある宝塔、五輪塔などと異なる独特な造形であることから、「薩摩塔」と仮称しました。

その後、薩摩塔は、県内では川辺町に 3 基、隼人町に 1 基、県外では長崎県や佐賀県・福岡県でも確認されました。また、中国の浙江省や福建省でも薩摩塔の存在が確認されています。

多くは類似しているが、石材が同一である外は全く同形のものはないそうです。

薩摩塔の石材は、すべて中国浙江省に産出する「梅園石」であると検証されましたが、だれが、いつ、なんのために造ったかは、まだ謎につつまれたままとなっています。

輝津館の薩摩塔

歴史民俗資料館所蔵品紹介

帖佐修験米良家伝蔵「米良文書」について

坂　元　清　美

姶良市民俗資料館の寄託文書の一つに「米良文書」があります。平成24年7月21日から9月2日まで姶良市歴史民俗資料館で「修験者・米良家の宝物展」が開催されました。

「米良文書」は、米良存良坊重真を初祖とする帖佐修験（山伏）米良家に代々伝えられた80点余りの文書群のことです。

これらは、6割が17世紀を中心に18世紀半ば以前の江戸前・中期の近世の古文書で、残りは幕末・維新期のものです。中世にさかのぼり、米良氏の出自を明らかにするもの、戦国期の米良一族と島津義弘との関係を語るものなどがあります。江戸時代には帖佐米良家が藩主や藩の重臣家と特別な関係で結ばれた家格の修験家であったことを伝えるものもあります。

その他に、江戸期の稀少な修験職補任状の数々、藩家老家の島津忠広およびその子孫と米良家当主との親密な関係をうかがわせる往来文書、明治初期の松原塩田の開発関係文書などもあり、興味深い貴重な文書です。

花園寺跡(旧米良家)石庭発掘状況

平成24年度ボランティアガイド実施報告2

① 7/10 日置市伊集院福祉グループ研修視察

② 8/28 帖佐中学校家庭教育学級史跡めぐり

③ 10/6 ムーミン講座Ⅰふるさと発見歴史講座

④ 10/9 姶良あやめ学級史跡めぐり

⑤ 10/16 加治木あやめ学級史跡めぐり

⑥ 10/20 重富小学校5年生白銀坂登山

⑦ 10/25 加治木ゆずり葉学級史跡めぐり

姶郷(あいきょう)

加治木げた

佐土原　保　子

現在はほとんど見ることのない**げた**、70年前の子どものころのお正月には、真新しい**げた**を必ず買ってもらったものです。

杉の焼きげたで、赤い鼻緒の**げた**です。うれしくてゴムまりと一緒に布団の中に入れて寝て、元旦の朝を待つのが楽しみでした。そのころ、加治木**げた**が必ず家族人数とは別に余分に用意してあったのを、はっきりと記憶しています。

田舎道を歩くのに便利なように、台はぽっくりに、ぞうりの部分は足裏にぴったりつくように竹の皮で作られていました。農民の生活の知恵で、台は杉材で軽く細めに、ぞうりは泥はねを防ぐため台よりも少し広めに作られていました。

加治木**げた**と呼ばれるので、加治木で作られたものかと思っていましたが、実は栗野の幸田が産地でした。農家の副業となっていたのです。

加治木は、明治以降昭和の終戦前まで姶良・横川・栗野・大口・伊佐方面の物資の集散地としてにぎわっており、**げた**も売られていたので加治木**げた**と呼ばれるようになったとのことです。

現在では物産展などで製作展示されています。

昔が懐かしく思い出されます。

歴史用語解説　（竹之下 洲 一）

『北面の武士』　院の北面とも呼ばれ院司の一つ。院の北面で警衛にあたる武士。白河上皇のとき創設。のち平安末期上北面と下北面とに分かれ、上北面は四位、下北面は五・六位の者を任じた。員数は不定。上皇に直属し、当時の院政を支える重要な武力となった。

「賞典禄」　王政復古に功労のあった者への行賞(現米給付)。明治2年(1869)6月、維新政府が没収した幕府や佐幕諸藩・旗本などの領地からの年貢を財源にして実施。

編集後記

本協会では6月には鹿児島下町地区の、9月には坊津の研修視察を実施しました。いずれも奥深い歴史あるたたずまいに、感動を覚えました。その一端を報告します。

姶良市は指定文化財の数が県内で最も多く、今後とも史跡ガイドが充実したものになるように努めてまいります。

皆様方のご理解と・ご支援をよろしくお願いします。